郷土史 ていね

創刊号

平成２０年１月９日

手稲郷土史研究会会報

飛躍の子（ね）年に

手稲郷土史研究会
会長代行　茂内　義雄

当郷土史研究会は平成１７年秋に産声をあげて以来、三年次を終えようとしております。顧みますと地域連町、各種団体等の強力なご支援を賜わりながら、お陰様で５０数名の会員一同、手稲の郷土資料発掘に研さんしているところです。

毎月の例会には、３０～８０歳余の幅広い年齢層の会員が、手稲の歴史を知りたい・調べたい・伝えたい、そうした意気込みで会場の区民センターに夜駆けつけて来るのです。当日の講師のお話や資料に目を通しながら、和気あいあいと夜９時頃お開きです。

今後は更に、日頃の各自の研究テーマを基盤に、積極的に発表し合いながら手稲史の積み重ねを進めていきたいものです。

こうした折りに、今回会報が発刊されますことは、会の情報源として大事な役割を担ってくれるでしょう。

なお、発足時より当会長としてご指導頂いていた小林幸男先生が、体調不良のため平成１９年１２月１２日付で辞任されました。一日も早いご回復を願って、私たちに手稲のむかしばなしを語っていただきましょう。

手稲郷土史研究会会報の発刊を祝して

手稲区長　小山　高史

手稲郷土史研究会の会報発刊にあたり、心よりお喜びを申し上げます。

手稲郷土史研究会が平成１７年９月に創立以来、今日では５０数名の会員を擁する団体へと発展され、手稲区の歴史にまつわる種々多様なテーマについて、熱心な研究活動を続けておられますことに対し、深く敬意を表するものであります。

さらに本年度におかれましては、毎月の定例会のみならず、石狩市の郷土史研究会とともに山口運河探検ツアーを実施されるなど、その活動は手稲区内にとどまらない活発なものとなっており、研究会活動の益々の発展が期待されます。

この度は、手稲郷土史研究会による初めての会報の刊行ということでございますが、この会報が、会員相互の交流をより一層深めるとともに、地域への貴重な情報発信となり、研究会の活動が、発展を続ける手稲区のまちづくりに寄与されることを念じて止みません。

今後の会員の皆様の益々のご活躍を祈念しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

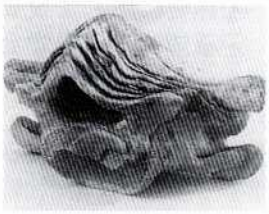
「エッ！北極クジラの化石が手稲で出た？」

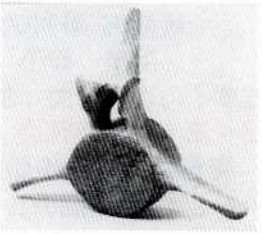
◆札幌市「出前講座」：平成19年12月12日　**講師　古澤　仁氏**
（札幌市博物館活動センター学芸担当係長、理学博士）

一瞬、120に近い目と心がパッと開きました。手稲山のそそり立つ崖（火口壁）馬の背のようになだらかな西野側の溶岩流、テイネオリンピア、ゴルフ場から稲雲高校、稲穂中、本町に至る岡は地滑り地形など火山活動が成因。星置駅裏の崖は海が迫っていた先史時代に削られたものなど夢のように美しいパソコン画像を白壁いっぱいに映した説明です。

そして山口、前田、新川、石狩に及ぶ紅葉山砂丘群の出来た話、そこは手稲の縄文時代人の家（竪穴）墓石、人の歯、漁場も見つかった地域です。

次に中ノ川と新川合流点で昭和48年「手稲中継ポンプ場」（新発寒7条11丁目）新設の基礎工事中のこと。13～14m掘ると「出た！」7千年前の北極クジラの見事な頭骨と脊椎骨の化石が札幌で初出土。北海道に現れないはずだがなぜ？36種類もの貝化石も出ました。「エッ知らなかった海だったの～」の声。さらに豊平川で小6の女子が「札幌海牛」化石大発見の例など楽しく、判りやすい専門の話しに90分はアッという間でした。





前田砂層から出土したホッキョククジラの頭骨（上）と脊椎骨（下）

発足からの歩み

【会議・定例会など】

手稲郷土史研究会（仮称）結成の為の予備会議
平成17年9月14日(水)
手稲区民センターにて46名で発足
手稲郷土史研究会則(案)提示
会長 小林幸男　　副会長 茂内義雄
事務局長 伊澤敏幸

手稲郷土史研究会結成式
平成17年9月27日(火) 手稲区民センター
研究会結成記念講演
演題：「戦前の新聞記事から読み取れる
手稲地区のよもやま話」
（大正15年から昭和10年頃まで）
講師：茂内　義雄氏

手稲郷土史研究会発足記念会開催
平成17年10月4日(火)：午後6時～
手稲コミュニティセンター

第1回手稲郷土史研究会開催
平成18年4月8日(土)
議題・手稲郷土史研究会会則について
理事・監事の選任について

第2回手稲郷土史研究会開催
平成18年6月21日(水)
手稲区民センター
議題 1　月例会及び年間研究スケジュールについて
①会テーマ「資料に基づき手稲を知ろう」
・前半60分資料「手稲100年の歩み年表」使用し検討する
・後半60分会員各自の研究テーマ発表を行う
②例会は月／1回　第二水曜日午後 6:30～8:30　会場は当分区民センター使用
③年会費　一人1,000円
会場・通信・事務用品費等
④必要に応じて役員会を開催
⑤希望により見学会を行う
議題2　事務局体制について
会長：小林　幸男　　副会長：茂内　義雄
事務局長：伊澤　敏幸
理事：総務部 鈴木清士（部長）田邊　斉
望月加代子　高木秀子 佐藤　香
研究部 野村武雄(部長)　一ノ宮博昭
浜埜　静子　景浦　強
監事：山本　昌美　加藤　利昭

第2回～第18回定例会
(1)「資料に基づき手稲を知ろう」を研究テーマとして、茂内副会長の指導により次の研究を行った。
①「手稲百年の歩み年表」の読み合わせ
・検討（第2回～第12回）
②区内方面別郷土史「ていねにきた人と出来事」研究（第13回～第18回）
＊テキストとして「札幌のむかし話」を使用
（茂内副会長からの寄贈）

定例会で講師（茂内副会長）の話に熱心に耳を傾ける会員

(2)会員の研究発表・郷土史夜話
＊発表内容等については、次頁の「会員発表・郷土夜話ダイジェスト」を参照
(3)外部講師による講話
①「村上藤吉を追い求めながら
～歴史を調べる事と自己認識～」
－井上伝蔵・藤の湯・石狩との関係史を含めて－
講師　間所　正樹氏（元小学校校長）
著書「手稲の郷土誌」ほか
②「先史時代・手稲地域の古生物・砂丘・湿地・泥炭・山・川の成因等」
講師　古沢　仁氏(札幌市博物活動センター学芸担当係長　理学博士)

【史跡等の視察・調査】

第1回手稲地域史跡視察・調査
平成18年10月21日(土)12:00~17:00
訪問先：手稲記念館、手稲鉱山遺跡、山口運河光風館跡地、バッタ塚など18か所
参加者：27名幼稚園バス2台に分乗

山口運河探検ツアー
平成19年7月28日(土)9:00~14:00
探検地：運河入口の小樽銭函から石狩花畔までの運河跡地を辿ってみる。
参加者：40名　石狩市郷土研究会員も参加
貸し切りバスに乗車

手稲北小資料室見学および懇親会
10:00~14:00
訪問先：手稲北小資料室、山口運河散策
星置会館屋上において懇親会
参加者：20名
＊視察・調査の詳細については、4～5頁の「収穫いっぱい“課外授業„」を参照

平成19年度総会（5月定例会時に）
平成19年5月9日(水) 手稲区民センター
18事業・決算報告、　19事業計画・予算案

【会員発表・郷土夜話ダイジェスト】

（別 表）

1	18. 6. 21～ 義経の宝物埋蔵金伝説ほか 一ノ宮 博昭	自身で地域のミニコミ紙「ていね倶楽部」を発行していた際に取材した、「手稲山義経埋蔵金伝説」のヒット発表後、村上藤吉と藤の湯、曙の北日本飛行学校と千田モト、脱獄犯白鳥など多彩な変化球のピンチヒッター役で郷土夜話をこなし、研究会の肩凝りをほぐす話題と資料を提供し続けています。
2	18. 7. 12 山口運河とバッタ塚（紙芝居） 伊澤 敏幸	山口運河保存に力を注いでいる氏は、地域有志の自筆運河風景の「紙芝居―山口運河物語」を昭和の活弁よろしく熱演発表。明治の船便、排水の歴史と運河祭りの現状などについても語り、会員は記念センベイを賞味しながら耳を傾け、運河への関心を深めました。
3	18. 7. 12 手稲の昔と自分史 平佐 伸二	初期入植者の子孫。自分史を作成したことを基に、先人の偉績などについて語った。なお、浄財5万円を期待する当研究会に寄付。会員一同感謝し、部外講師の招聘、会員視察会費に活用しました。
4	18. 8. 9 札幌・手稲の碑 神部 慎一	オール札幌の碑（いしぶみ）を研究中、手稲関係分をパソコン印刷で文献資料フイルドワークの成果を示し、インターネット情報と部会研究の必要性を訴えました。
5	18. 9. 13 時習館と三木勉、上手稲 小林 幸男	多年の教育経験、手稲中央小同窓会長の情報も駆使し、明治5年手稲の先駆者として仙台白石から上手稲村に入植した、三木 勉と時習館について熱弁を振るい、会員の視察研修に繋げました。
6	18. 12. 13 19. 1. 10 北日本飛行学校とロマンス 一ノ宮 博昭 野村 武雄	はじめに、一ノ宮会員が曙にあった飛行場では、滑走路が悪いため着陸の際よくひっくり返っていたなど、古老からのむかし話が披露された後、 野村会員から手稲で唯一の立志伝中の人・千田モトさんと飛行パイロットの安田行英さんとの大ロマンスが語られ、二人の満州への恋の逃避行、終戦による傷心の帰国、バレエ学校の創設など流暢な語り口で発表されました。
7	19. 2. 14 江連力一郎がるかわで逮捕 一ノ宮 博昭 鈴木 清士	大正時代の海賊、任侠江連力一郎が、軽川駅で逮捕された当時の状況については、一ノ宮会員が・・その時代的背景となる「尼港事件」や海賊行為の状況などについて鈴木会員が発表した。なお、氏の母親の養父が江連と親交のあったことが研究の動機とのこと。
8	19. 6. 13 手稲山の自然を語る 浜谷 義昭 景浦 強	浜谷会員は、長い自然活動と手稲山登山の体験から、最新情報で手稲山の成因を紹介しました。 景浦会員は、手稲登山道の多様な景観や体験について地図を使って発表。山の熊、高山植物などの保護と注意に会員の関心を深めました。
9	19, 10. 10 旧前田農場、自作農となった人々 竹内 伸仁	前田4条で薬局経営の若手会員。父稔氏は前田地域研究の必読資料「前田の自作農創設五十周年記念誌」の編集長で、開拓功労者の一族。多くの貴重な写真、書類、物語を保存しています。貴重な一部をパソコン映像で再現し、往時の農作業や生活の様子が理解され、再度の発表を期待しています。
10	19, 10. 10 開拓秘話―岡本お婆さん録音インタビュー 原谷 哲男	星置開拓の生き字引、「岡本婆ちゃん」のインタビューで録音した記録を印刷して会員に配布し発表。 若い小学校教師である会員の熱意と生の郷土資料の迫力に感動し、この努力が生き証人の居られる間に急がれることを痛感しました。
11	19. 11. 14 もう一つの前田～共和町前田を訪ねて 川崎 吉充	前田町内に移住し、旧前田農場と自作農創設、手稲山造林、酪農の農場主前田利為（としなり）陸軍大将（ボルネオで戦死）に注目。同じ前田家創設の元前田村（合併し現共和町）を較べ研究中、その現地調査資料、エピソード、先人の苦労と子孫の姿を報告。手稲前田の都市化との違いに驚いていました。
12	19, 12. 12 手稲墓地の二つの墓碑名から 水落 恒彦	稲穂開拓の旧家一ノ宮会員の助言と間所講師の詳しい町村史、誌の比較検討にヒントを得て村上藤吉関係墓誌、菊地次郎校長の墓など「記念物研究」をしてきました。藤吉の家系の謎を調べ、孫に当たる由（ゆかり、大正2年下手稲小卒業）に関わる戸籍名の文字の異同を探求し、当時の社会史を探る基礎となる一次資料をコピーし配布しました。

【お知らせ】以上のように、多種多様な発表、公式記録にないおもしろい夜話など、参集会員の楽しみと期待の多い時間です。　申し出は１ヵ月前までに事務局長または研究部長まで
①題名　②要旨Ａ４で１枚以内　③３０分内とし、連絡ください。調整します。

収穫いっぱい“課外授業”

手稲記念館（西区）前の開拓記念碑

【こんなにあるの？手稲の名所】

◆ 第１回手稲地域史跡視察・調査＝平成１８年１０月２１日

幼稚園から借り上げたバス２台に２７人が分乗、説明を無線で飛ばし、後続バスが受信する仕掛けで、正午、区役所を一路東進。午後５時、帰着するまで１８か所を案内する欲張りツアーになりました。

大正天皇行幸記念碑、銭湯「藤の湯」、サンタルベツ駅逓跡、乙黒製油所、塩野谷牧場を通過、手稲記念館へ。手稲の成り立ちを知る貴重な資料にびっくり。開拓記念碑前で記念撮影。このあと、時習館記念碑へと足を進めました。

星置通洞坑の坑口で参加者の記念撮影 ▲

一行はこのあと、国道を西進、光風館跡地、旧手稲鉱山の星置通洞坑を見ました。重い鉄の扉が開きひんやりした廃坑を５０ｍほど入りました。赤くさびたトロッコや掘削用具が放置されていました。坑道は、直線で約４Ｋも手稲山の真下方向に伸びているという説明に一同びっくり。坑口で記念撮影し西小の鉱山の部屋に、こんどは石狩湾方向に下り、山口地区のバッタ塚、山口運河、山口墓地、山口緑地、土功川、北日本飛行学校跡などを視察、どこにも面白い話がいっぱいあるとの解説に、一行は「名所がこんなにあるなんて」「ますます手稲が面白くなってきた」と一様に口をそろえていました。

説明には、茂内義雄副会長、伊沢敏幸事務局長、一ノ宮博昭理事が当たりました。

【山口運河の始点、終点はどこ？】

◆ 山口運河探検ツアー＝平成１９年７月２８日

星置地区センターに集合したのは、石狩市郷土研究会会員を含め約４０人。貸切バスでまず銭函の旧星置川河口へ。

手稲区山口の山口運河は、きれいに整備されているものの、この運河とはどこから始まって、どこにつながっているか、この目で確かめようとの趣向。小雨の降る河口は玉石が盛り上がり、打ち寄せる波が白く砕けていました。「ここを舟が登った？」。まず、疑問が頭をかすめました。

バスの移動ながら、狭い小川をたどり、山口運河へ。そして山口排水、山口川、山口川橋とたどり、国道３３７号線沿いに東進、新川と直角に交差します。この交差が問題。「2 階建てになっていた？」「まさか」。運河は石狩新港工業団地に入り、造成で埋没したり、深い素堀りが点在したり、面影をなくしていました。さらに石狩街道を横断して茨戸湖へ。近くに石狩市庁舎も見え、運河の面影が。花畔・銭函運河跡地の碑で記念撮影しました。この間、約１５Ｋ。記録では明治２８年掘削開始、３０年完成、３４年の通船記録では１４００艘、積荷５万個となっています。札幌までの所要時間は８時間でした。４，５人の人夫が両岸から綱で舟を引いたとあります。

石狩の運河記念碑を囲んで

紙芝居「山口運河物語」より→

運河の両岸から人が綱で舟を引いた

そこで、また疑問。「誰が掘ったの」「何人でやったの」「１５Ｋも掘るくらいなら、石狩川から登った方が楽だったろうに」などなど。問題の川の交差は、２階建てではなく、後に「閘門」といわれるセキを造り、水位を調整して通行していたことがわかりました。

□あの、めぐみちゃんも登場

昼食後、石狩市役所で郷土史研究家田中実さん（元石狩町助役）から、樽川村の開拓、運河の造成について講義を受けました。この中でびっくり仰天したのは、北朝鮮に拉致された横田めぐみさんの曽祖父が樽川村開拓の１人だったと紹介されたことでした。

横田滋さん夫婦は、年明け早々に石狩市内で講演会を開催しましたが、この整理券配付は、わずか3時間でさばく人気だったそうです。

一行は、川の博物館にも立ち寄り、運河掘削の指導に当たった岡崎文吉博士について勉強しました。資料提供や説明には茂内副会長、伊沢事務局長（前星置連町会長）があたりました。

一杯入れば、みんな手稲の大講師

展望の素晴らしい屋上での歓談

◆ 会員交流・懇親パーティー＝平成１９年８月１８日

会員同士もっと親しくお付き合いしましょうと、星置会館屋上の特設会場でジンギスカン・パーティーを開きました。２０人が参加しました。

いきなり飲んだ、食べたでは格好がつかないと、名目的に北小の資料室を見学しました。古い農機具、生活用具、懐かしい事務機などが数百点も。学校側の好意でスイカが差し入れられ、交流の輪は一気に広がりました。このあと、山口運河を徒歩で見学、はじめて見たという人もいて、「これは勉強する価値がある」と興味は盛り上がりました。ナベを囲めば、もうすっかり友だち。グラスが傾くたびに話題は広がり「あの話を聞いてみたい」「あの話の切り口は少し違うみたい」「こんどオレがやってみる」など、手稲のコメンテーターが続出しました。

【手稲山に新トンネル、１８０人見学】

◆手稲鉱山新トンネル見学会＝平成１９年９月３０日

稲穂金山活性化推進委員会（一ノ宮博昭会長）の企画で、会員や地区の住民ら１８０人が参加、色づきはじめた手稲の山容を楽しみました。

金の産出量では国内有数といわれた手稲鉱山は、昭和４６年閉山しましたが、坑道は最底部の星置通洞坑の出口を密閉しただけでした。このため昭和６３年、水圧で密閉壁が破れ、稲穂地区が水害に見舞われました　住宅が鉱山用地に迫ってきたこともあり、三菱マテリアル（株）が地下水の中和恒久対策事業として平成１８年から工事を進めていました。５合目の通称・三ツ山に深さ２０００ｍの立て坑があり、ここに長さ７４０ｍの斜坑を掘って立て坑と結び、パイプで地下水を吸い上げて中和し、遊歩道沿いに埋設したパイプで下流に流し、稲穂川に放水するものです。

遊歩道「乙女の滝ルート」の登山口に集合した一行は、約２Ｋを１時間かけて坑口に到着、エコマネジメント（株）手稲事業所長の説明を受けたあと、貫通したばかりのトンネルに長い列を作って入坑しました。直径４．５ｍもある大きなもので、薄ぼんやりとした電灯が延々と伸び、低くよどむ空気に緊張しながら奥へ、奥へ。ゆるやかに下る構造に驚きながら坑口に引き返しました。

坑口周辺には、吸い上げたドロを除去する巨大なプールなどがあり、このドロをどう利用するか専門家の研究施設完成は平成２０年。帰路、一行はやさしく滑りおりる乙女の滝に立ち寄り、秋の一日を楽しみました。

（写真は坑口で説明を受ける新トンネル見学者）

月例定期研究会創立1年半の「基本講座」の流れ

平成17年9月27日(火)46名で結成。
発足の記念講演は、茂内義雄副会長(元札幌文化資料館、札幌市内小学校長歴任)が行いました。

平成18年4月8日第1回研究会がスタート、爾来1年半、全員共通資料で地道な研修を重ねてきました。　　＜郷土史研究の三種の神器＞

①年表「手稲百年の歩み」・・・・時間の流れ
②地図「手稲区ガイドマップ」・・土地、川、生活の基盤
③地図「西　区ガイドマップ・・西野地区は歴史的に上手稲村

手稲の歩みについては、年表により新発見事項を交え1年ごとに加除訂正、説明を続けました。

第2回目からは、毎月第2水曜日18時30分から19時30分までの1時間をこの「基本講座」に当てることにして、茂内副会長が指導されました。 毎月10年分を研修し、11回休みなく続けられました。

会員も年表と地図をにらめっこしながら多いに質問も出来るようになりました。

平成19年4月の第12回目より、茂内副会長から自著「札幌のむかしばなし」を全会員に寄贈いただき、これをテキストとして第18回(H19. 10月)まで使用して講義を受け、「ていね各地域の人や出来事」について勉強しました。

郷土史研究
三種の神器

☆★☆次回研究会のお知らせ☆★☆

平成２０年２月１３日　第２２回研究会

講話　「手稲スキー物語」
名物スキー饅頭と田邊商店
ジャンプ、ヒュッテ、名プレーヤー
札幌オリンピック手稲会場など

講師　田邊　斉 氏（元道庁広報課編集担当）
田邊 安徳氏（手稲スキー競技連盟事務局長）
＊　開拓期から手稲駅前商店街の旧家一族で、お二人は兄弟

会員発表「前田・富丘地域の歴史～写真」
発表者　中野 豊会員（会社役員）
＊　前田農場の元農場長ご一家、残されている多くの写真記録や伝聞を中心に発表します。

会員発表「川の変化の歴史から」
―その名称、役割、流路などと人間生活の関わり―
発表者　中村 恭治会員

平成２０年３月１２日　第２３回研究会

講話　「小樽・手稲交通史」
―銭函・山口・花畔運河の堀削と役割―
オタルナイアイヌなど

講師　竹内　勝治氏
小樽おもてなしボランティア会長
小樽市博物館歴史文化調査会会員
論文：「銭函・花畔運河の消長」

会員発表　募集中

【曙の飛行場と大ロマンの行方語る】

◆　第６回いなほ文化祭＝平成１９年１０月１３日

手稲ではほとんど語られたことのない壮大な歴史ロマンを、稲穂会館で野村武雄研究部長がやさしく解説しました。

冒頭、一ノ宮理事が北日本飛行学校という操縦士養成学校が曙にあり、軽川では恋の逃避行といわれた大ロマンがあったと紹介、野村氏にバトンタッチしました。

野村氏は、この主人公は手稲の立志伝中の人・千田モトさんと指導教官・安田行英さんだと説明、千田さんの親が手稲駅前で小間物商をしており、ここに安田さんが下宿していたので、高女生だったモトさんが好意を持っていたとしても、さほど不思議なことでないとしました。

安田さんは空軍兵士として満州に行き、モトさんとめでたく結婚、一男二女に恵まれました。静かな１０年ほど過ぎたとき、突然、ソ連軍が侵攻、満州は未曾有の大混乱に陥ります。夫の行方が不明のまま、モトさんは、命からがら引き揚げましたが、男児と死別します。

そのころ、安田さんは軍の命令で、満州最後の皇帝・愛新覚羅溥儀の日本亡命機のパイロットに指名され、満州各地を皇帝とともに転々とし、ソ連軍の捕虜になりました。皇帝は毛沢東に引き渡され、安田さんはシベリア送りになりました。

声楽家を目指していたモトさんは、バレエで生きると決意、札幌で舞踊会を設立、道内のバレエ普及に専心、札幌市、道、文科省などから数々の表彰を受けました。モトさんの次女・雅子さんは母親の遺志を継ぎ、現在も南区で札幌舞踊会を主宰しています。

モトさんは、真夏の行事としてだれの耳にも残るこども盆踊り歌の普及でも第１人者だそうです。平成１０年、８２歳で生涯を終えました。

講演会には１３０人が参加、野村氏の流暢な解説に耳を傾けました。

千田モトさんについて講演する野村武雄氏（当会研究部長）

投稿のお願い　（広報担当：高木・佐藤）

会報を毎月発行する予定です。次号からは会員みなさんのおしゃべりを取り上げていきたいと思いますので、川柳、エッセイ、その他面白い話題などたくさん投稿ください。

原稿は、定例会の際に広報担当に・・